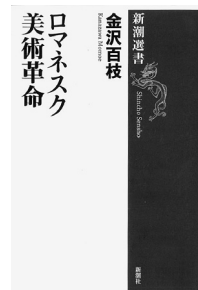




金沢百枝さん  
(東海大学教授)

かなざわ・ももえ 1968年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。理学博士・学術博士。東海大学文学部ヨーロッパ文学科教授。2011年、鳥田謹二記念学藝賞を受賞。著書に『ロマネスクの宇宙—ジローナの《天地創造の刺繍布》を読む』(東京大学出版会)、共著に『イタリア古寺巡礼』シリーズ(新潮社)がある。

photo: Yasuharu Sugano



『ロマネスク美術革命』  
新潮選書 1,400円

BOOKS

知識より感情を、写実よりかたちの自由を……。十一世紀から十二世紀の社会変動期のヨーロッパに現れたロマネスク美術は、かつてない美のインパクトで、ヨーロッパ美術を塗り替えた革命だったのだと、『ロマネスク美術革命』の著者金沢百枝さんは語る。話を聞いた。

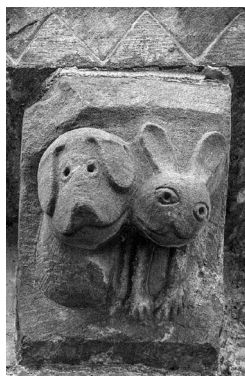
——ロマネスク美術は、どのような時代に生まれたのでしょうか。

ヨーロッパには、西暦一〇〇〇年ごろから、地球規模の温暖化の恩恵や、農機具の進歩によって、人口増加がもたらされました。十一世紀から十二世紀は、ヨーロッパが豊かになっていくとともに、地方の封建領主たちが力をつけようとしていた時代です。各地に新しい村と、キリスト教の教会堂を建てていくという開発の時代がやって来っていました。

ロマネスクの美術は、主にこの

時代に建てられ、現在も残っている教会堂に見ることができます。教会堂には、古来からさまざまな装飾がなされてきましたが、ロマネスク時代に建てられたものは、たとえば持ち送り(軒下で屋根を支える部材)の飾りを見ても、それまでの飾りの主体であった植物文様や幾何学文様に代わって、不思議な、異形のものたちの造形がそこを飾るようになっていきます。動物であったり怪物や人間などの

BOOKS



多様な姿の意匠たちです。——本の帯の写真にもなっているイヌとウサギの彫刻(左)は、どのようなものなのでしょうか。イギリスのイングランド南西部のヘレフォードシャー州で十二世紀に建てられたキルベック教区聖堂の持ち送り彫刻です。なんとも言えない表情の顔をくつつけて、足をぶらんとさせてる姿に、私の頬はいつもゆるんでしまいます。詳しい解説は、本を読んでいただけならと思うのですが、この聖堂の持ち送り彫刻は、すべてがこのような穏やかな気持ちで眺めら

れるものではありません。聖堂の持ち送りには、「あまりにふしだらで教区民に悪い影響を与える」との理由で、十九世紀の牧師が削ったり破損した十二の彫刻があったことを含め、かつては九十一の彫刻があったことがわかっています。

残された彫刻には、人が動物に、鳥が蛇に食べられている捕食の図や、人間同士が戦っている戦闘の図など、キリスト教の一般常識では、どう解釈をしたらいいのかと悩むものが数多くあります。

中世の聖堂美術を論じるにあたって、近現代の常識に当てはめ、その「教義」に沿って読解することとがいかにか時代錯誤であるかを指摘するのがマイケル・カミールですが、彼はまた、石の叫びを聴き取るように、と呼びかけた人でも

あります。教義や論理を超えた身体的・感覚的な共感こそ優先されるべきだと。

私自身の考えも、カミールのこの思いに同調しています。キルベック聖堂の異形の持ち送り彫刻たちの、喰う、喰われるもの、追う、追われるもの、戦う者の姿に、私は「葛藤の情景」のありのままを感じています。

ロマネスク美術では、建築部材という「枠」の中で、「枠」に従っているように見えて、実は巧みにそれを逆手に取り、表現の自由を謳歌している見事な造形に出会うこともしばしばです。

その感動とは、定型詩という制約の中で、和歌や俳句の作者たちが見事に花開かせている言葉の世界と出会ったときの喜びにも、似ているのかもしれない。